秋水通信

第35号

2023.7.20

幸徳秋水を顕彰する会
〒787-0010 四万十市古津賀4−41
四万十市生涯学習課内

ホームページ
http://www.shuusui.com/
090-6827-9129（田中全）
メール:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

神戸サミット　140人つどう

大逆事件を明らかにする兵庫の会　代表世話人　津野公男

五月二七日、第5回大逆事件サミット神戸大会を神戸市元町の兵庫県学校厚生会館で開催しました。

「幸徳秋水を顕彰する会」（高知）や「森近運平を語る会」（岡山）「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」（和歌山）「明科大逆事件を語り継ぐ会」（長野）「京都丹波岩崎革也研究会」（京都）、「堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也の三人の偉業を顕彰する会」（福岡）、「管野須賀子を顕彰し名誉回復を求める会」（大阪）などからたくさんの方々に参加していただきました。秋水通信をつうじて、関西の幸徳秋水を顕彰する会の方々も何人か（高知からの参加の方とは別に）参加いただきました。結局、地元兵庫の参加者をも合わせて、一四〇人の方に参加いただき、大盛況となりました。

山泉進・大逆事件連絡会議事務局長（明治大元副学長）による「大逆事件の真実（神戸と大逆事件）」、『神戸平民倶楽部と大逆事件』を著した上山慧さんによる「神戸の大逆事件の犠牲者、岡林寅松と小松丑治」の記念講演、その後全国各地で大逆事件の真実を明らかにし犠牲者の名誉回復を勝ち取り、顕彰する活動を続けている方々の活動報告が行われました。締めに今後も活動を続け広げて行く決意のこもった「神戸宣言」が採択されました。

翌二八日は、神戸の犠牲者岡林寅松と小松丑治ゆかりの跡である神戸多聞教会、大倉山いのちと平和の碑（神戸空襲の碑）、夢野橋、小松夫妻の養鶏場跡を巡るフィールドワークが行われ四〇人の参加をいただきました。

報告集については「データ」になりますが、テープ起こしをし、七月中には出来上がると思います。

「兵庫の会」もサミット成功で息切れしないよう、九月二日（関東大震災の翌日）に堀和恵さんのご協力を得て「伊藤野枝」の学習・講演会を予定しています。

このサミットの受け入れ組織である「大逆事件を明らかにする兵庫の会」の世話人一同、全国で引き継がれてきた灯を絶やすことなく、次回サミット（二〇二五年秋、岡山県井原市予定）につなぐことができたことにほっとしています。また、何くれとご支援ご指導いただきました幸徳秋水を顕彰する会の方々にお礼申し上げます。

兵庫県学校厚生会館
神戸市元町

2日目フィールドワーク
大倉山　神戸空襲の碑
神戸平民倶楽部の井上秀天の名前が犠牲者の1人として刻まれている。

神戸宣言

三年にわたるコロナ禍を克服して、ここ神戸で第五回大逆事件サミットを開催できたことに、心から歓びを分かち合いたいと思います。その間に、神戸では「大逆事件を明らかにする兵庫の会」を立ち上げ、講演会の開催や各地との交流会を重ねてきました。

ここ神戸で「大逆事件」の犠牲者となった岡林寅松と小松丑治は「非戦論」を掲げて日露戦争に反対する週刊「平民新聞」の主張に共鳴し、「神戸平民倶楽部」を結成しました。そして、幸徳秋水、森近運平、大石誠之助、内山愚堂らとの交流をはかりました。そのことだけで、政府の社会主義者根絶という方針のもとで「大逆事件」の被告となり、一九一一（明治四四）年一月一八日、大審院において死刑の判決を受けました。翌日に無期懲役に減刑されましたが、一九三一（昭和六）年四月二九日仮出獄するまでの獄中生活、その後の社会生活において、本人はもとより家族が受けた苦難は筆舌につくせないものがありました。

他方では、神戸で創刊された英字新聞「ジャパン・クロニエル」は、日本政府の社会主義者たちに対する弾圧を批判し、思想と言論の自由を主張し続けました。また、弱冠二十歳の大塚金之助は「神戸高等商業学校学友会報」において、国際的な抗議活動を呼びかけたエマ・ゴールドマンを紹介し、抗議の意を示し、当局から処分を受けました。

神戸は幕末においていち早く開港し、西欧文明を受け入れ、「人権」思想を発展させた国際的な都市でもありました。

「大逆事件」は、戦争と同じく国家による犯罪であります。いままた、ロシアによるウクライナ侵略が続いています。私たちはあらためて戦争に反対し、国家による人権弾圧に抗議したいと思います。「平和」の構築と「人権」の尊厳をめざして、そして岡林寅松や小松丑治などの「大逆事件」犠牲者たちを顕彰し、名誉の回復をはかる活動を継続していくことを、ここ神戸で誓います。

二〇二三年五月二七日
第5回大逆事件全国サミット
参加者一同

参加団体

大逆事件の真実をあきらかにする会（東京）
大逆事件を明らかにする兵庫の会（兵庫）
幸徳秋水を顕彰する会（高知）
森近運平を語る会（岡山）
大逆事件の犠牲者を顕彰する会（和歌山）
堺利彦・葉山嘉樹・鶴田知也の三人の偉業を顕彰する会（福岡）
管野須賀子を顕彰し名誉回復を求める会（大阪）
京都丹波岩崎革也研究会（京都）
明科大逆事件を語り継ぐ会（長野）
奥宮健之の雪冤をめざす会（大阪）
伊藤野枝100年プロジェクト（福岡）

次回は二〇二五年秋
岡山県井原市開催予定

第6回大逆事件サミットは森近運平を語る会の協力をえて開く予定です。

神戸と大逆事件

サミット記念講演

全国連絡会議　事務局長
大逆事件の真実をあきらかにする会　事務局長　山泉　進

大逆事件の真実

与えられた講演のタイトルが「大逆事件の真実」というもので、とても短時間でお話できることではないのですが、私も「大逆事件の真実をあきらかする会」の事務局長を大原慧さんから引き継いで四十年になります。この会は、大逆事件の死刑判決から四九年目に、坂本清馬さんたちの再審請求を支援する市民組織としてつくられました。会のタイトルに「大逆事件の真実」とはいっていますので、断るのも変ですので、一応、そのことを意識してお話します。

再審請求の提訴から五十年後（処刑から百年後）の二〇一一年、中村で第一回大逆事件サミットが開かれました。それから今年で一二年目になります。再審請求は一九六七年、最高裁で棄却（門前払い）されましたので、法律的に言えば、被告たちは全員いまだに有罪のままです。しかし、私は、いま必要なのは有罪か無罪かよりも、この人たちが何を考えていたのかということを改めて問い直すことだと考えています。吉田松陰や西郷隆盛が有罪か無罪かをいま問う人はいないのと同じです。もちろん、法的救済という意味で、再審請求をあきらめているわけではありませんが、被告たちの思想を検証し、現代に生かしていくという市民による名誉回復がもっと大切なのではないかと考えています。

サミット開会挨拶　山泉進

ところで、事件から百年以上が経過して、いまだに大逆事件に対して関心がもたれ、全国各地で運動が続いているのはなぜか。そのことを考えれば、この事件が単なる冤罪事件だというだけではなく、国家の犯罪だという点に思い至ります。つまり、大審院を頂点とする司法当局の犯罪、あるいは社会主義思想を「根絶」しようとした桂太郎首相以下、当時の行政府による犯罪というばかりではなくて、国民を含めた国家による犯罪だというふうに私は考えています。

それでは、国家とは何か。定義はむつかしいのですが、対外的な戦争というものを考えてみれば、戦争は国家による最大の犯罪です。現在、ロシアによるウクライナ侵略がおこなわれていますので、「正義の戦争」を肯定したくなりますが、私は幸徳秋水たちと同様に、絶対的平和主義の立場にたって、いかなる戦争をも否定します。武力による国際紛争の解決は、人命や財産、文化を破壊し尽します。これを国内的にみれば、思想や信条の異なる人たちを「根絶」することが、これに相当します。それは天皇を中心とする国家体制と教育勅語を基本とする教育がもたらした結果であります。国家の犯罪には国民が加担している。ここがポイントだと思います。現在では、多様性を尊重することの重要性が説かれています。それは、国家が犯してきたことに対する反省と、人間の知恵とがもたらしたものです。

自由民権運動で言われた「天賦人権」の思想は、憲法などの実定法を超えた人間社会における「自由・平等・博愛」の実現は、天が人に与えた権利、人類の知恵が生み出した普遍的な権利という考え方です。大逆事件では単なる一個人の自由や財産などが奪われたのではなく、人類の一員として天から与えられた自由や人権が奪われたのです。だから国家の犯罪ということができます。

秋水らが唱えた非戦論は国家の犯罪を真正面から否定したものです。その思想のいきついた先が「無政府共産」というものでした。国民が抱いている天皇中心の国家という「共同幻想」の否定です。政府にとっては彼らのそうした信念・思想がけしからんということになった。大逆事件を考えるということは、一つの歴史的事件を解明するというだけではなく、国家の犯罪とは何か、そのことを考えるところに核心的な部分があります。そのことが、今でもこれだけ多くのみなさんが集まることになっているのではないか、そのように私は思っています。

ロバートヤングと大塚金之助

次には、いまの神戸ではあまり知られていないかも知れない二人の人物の話をします。一人はロバートヤング（Robert Young）で、いま一人は大塚金之助です。

ロバートヤングは一八五八年にロンドンで生まれた、植字工です。一八八八年に神戸にやって来て、一八九一年英字新聞『コウベ・クロニエル（Chronicle）』を創刊します。後に『ジャパン・クロニエル』と改名します。ヤングは社主であり、編集長でもありました。同社には一時、ラフカディオハーン（小泉八雲）もいました。ヤングは大逆事件に強い関心をいだき、幸徳秋水たちを擁護しますが、それは彼が社会主義者であったのではなく、リベラリストの立場から擁護しました。イギリスでは現在は保守党と労働党が勢力をもっていますが、当時労働党はまだ小さく、自由党が弱者である労働者の立場を擁護していました。

ロバートヤング
法律新聞1922年

自由党は個人の自由や権利を擁護し、弱者に対する社会福祉を重視します。これに対して保守党は国家を重視し、経済的には自由競争を主張します。ヤングは、リベラリストとしての立場から、日露戦争当時においても日本政府による思想弾圧を批判する記事を掲載しました。そのことは、『寒村自伝』のなかにも書かれています。

三面三段に続く

大逆事件サミットに参加して

本間眞由美

神戸で開かれた大逆事件サミットに参加をさせていただきました。

実は、昨年「100年の谺」の映画を見て以来、私もいつか大逆事件サミットなるものに参加をして、しっかり話を聞きたいものだと願っていたのです。そんな私ですから、山泉先生の講演の冒頭からいきなり感動でした。

「有罪か無罪か？　それよりも彼らがどんなことを考えていた人たちなのか、なぜ弾圧されるのか、そちらを検証していく段階だ」

そして（要旨ですけど）

「そもそも国家とは何なのか、司法だけの問題でなく立法システムを作った桂が悪いのか、エリートだけの問題か？

関わっている社会、国民・・・新聞・・・

戦争同様こうした国家の犯罪は個人ではなく、みんなの犯罪だ。防ぐ知恵こそ大事だ。」

国家の犯罪に一緒に加害者にならない知恵。それを学ぶ。そういう前提でお二人の先生の講演や各地の皆さんの活動報告をお聞きしました。

外国ジャーナリストの記録から、諸外国にどのように報道され、どう影響していたかというお話。具体的で、すごく興味深かったです。そして、大逆事件に対して報道管制がどれだけ厳しかったか、また諸外国からの日本政府に対する抗議に応えたその内容が逆に裁判が不当だったことの証明になっているということもよく分かりました。

国家安寧のために個人の自由や権利は制限されて当然という考え方があるけれど、付け込まれて傾きすぎてはいけない新たな視点を得ることができました。

一方、神戸では秋水に一度も合ったことがない人たちが巻き込まれていたことを知り、とんでもない事件だったとあらためて驚愕でした。この人たちのことを顕彰しようと地道に活動をされてきた方たちあってのことですね。心から敬意を表します。

私は七年前、神奈川から高知の中村に移住をしてきて初めて幸徳秋水の名前を知りました。特に大逆事件について知りたくて図書館に通い始め、そして秋水の研究会に入れてもらいました。一年ちょっと前です。

秋水は、鋭く本質を見抜く洞察力があって、それを万人に解りやすく、しかも胸躍るような名文で書き起こす天才だと思います。強引な国づくりを進める明治政府にとって恐い存在だったことは私でもわかります。そのペンを封じるだけでなく、これ以上ない罪人として葬って、百年以上経ってなお知らない人が大多数（私もその一人だった）という、この事件がどういうメカニズムで起こされたのか知りたかったのです。それこそ有罪か無罪かは問題じゃなくて、国家のめくらましにやられるままの国民でいたくないのです。

私にとって、このサミットで触れることができた内容は求めていたところとドンピシャでした。

また、それぞれの地域でそれぞれの思いで真実を知ってほしいと活動をしている方たちの、その空気を肌で体感できたのも貴重な経験でした。

それぞれの地域のそれぞれの思い。同様に、私は私の新しい感性でやれることをやっていこう、そう思って帰ってきました。

主催者の皆さん、素晴らしかったです。

私を連れてってくださった中村の先輩の方々、ありがとうございました。念願かなって、さらに期待以上でした。

（会員、黒潮町在住）

二面より続く

ヤングは、大逆事件の裁判期間中は一時帰国していましたので、イギリスの『タイムズ』や『デイリー・ニューズ』などの各紙へ積極的に投書し、またインタビュー記事も掲載され、この裁判が非公開で、不公正な裁判であることの実態を伝えました。また独立労働党の機関誌『レイバー・リーダー』には、「被告人たちはMikadoの命をねらった陰謀を企てたというが、この裁判を公平に見ることができる人間であれば、死刑判決という暴挙に対する単なる言い訳としか思われない」と掲載されています。

もう一人は大塚金之助です。大塚は著名な経済学者で神戸高等商業学校（神戸高商）を出てから、東京高商専攻科（一橋）に進み、大学昇格後の東京商科大学の教授になった人物です。しかし、治安維持違反の思想弾圧で免職、戦後は一橋大学（改名）や慶応大、明治学院大で教授をつとめました。一橋の社会思想史では高島善哉、水田洋らが教え子になります。

大塚は大逆事件後の一九一二年、二十歳の時、神戸高商の『学友会報』に「菖蒲花人」のペンネームで「主義者ゴールドマン」という文章を寄せ、冒頭「御存知の御方もあろう。エムマ・ゴールドマンという名は女の名である。亜米利加に居る露西亜女の名である。彼はもと一の女工に過ぎなかったが今は米国で最も名高い女である。僕が彼をここに紹介する理由は書かないでも分る」と記した。

大塚金之助（蒲二朗、前）
神戸高商卒業記念 1923 年

エマ・ゴールドマンはアメリカのニューヨークで『マザー・アース』という雑誌を出していましたが、秋水らの裁判に対して、いち早く抗議運動を呼びかけました。それはアメリカのみならず、ヨーロッパ各国まで伝えられました。ワシントンの日本大使館やニューヨークの日本領事館、あるいはロンドンの日本大使館には、数多くの抗議電報や抗議文が寄せられました。つまり、大塚金之助は、ゴールドマンの著作『Anarchism and Other Essays』の一部を翻訳したにすぎなかったのですが、間接的に大逆事件裁判を批判し、秋水らの思想（アナーキズム）の擁護をおこなったのです。この事件により、神戸高商の校長、図書館長は謹慎処分を受け、大塚は厳重監視のもとにおかれ、授業料免除の特典を剥奪されました。

神戸は幕末に開港された五港の中で横浜、長崎とともに（ほかに函館、新潟）いち早く、外国人居留地をつくったことで、欧米からの文化や思想を取り入れ、開放的な都市として発展しました。大塚の事件も、取締りの厳しい東京ではおこりえなかったと思います。

以上、神戸の大逆事件で犠牲になった岡林寅松と小松丑治については上山さんのほうで話をされるので、私のほうからは違った側面から、神戸と大逆事件のかかわりについて話をさせていただきました。

（記念講演のもう一つ、上山慧「神戸の大逆事件犠牲者　岡林寅松　小松丑治」は前号に関連の論考を掲載しましたので割愛します。）

高木顕明師に学ぶ　平等・平和・救済

真宗大谷派僧侶・作家　日野範之

私が東本願寺・同和推進本部に在籍中、一九九六年四月に高木顕明師の名誉回復がなされた。顕明師は大逆事件に連座したとして逮捕され、一九一一年一月、真宗大谷派から擯斥処分（除名）されたが、名誉回復は実に八十五年後のことだった。

顕明師が残した「余が社會主義」という文章について同推本部内で討論したのを思い出す。和歌山・新宮市南谷墓地に高木顕明顕彰碑を建立するからだった。

ロシア十月革命による社会主義政権の誕生が一九一七年。顕明師が秘かに「余が社會主義」を記したのは、その十三年も前の一九〇四年。社会主義社会がどんなものか想像もつかなかったろう。私が島根の田舎から大阪に出たのが六〇年代初めで、当時、社会主義を大っぴらに語ることは出来なかった。六〇年代でそうだから、顕明師の時代、もっと厳しかったろう。

＊

顕明師の「余が社會主義」はどんな内容か。原文は原稿用紙十枚の長文だが、中心部分を選び出して次に。（新字体に改め、カッコ内は補足。遠松とは寺の山号）

《明治三十七年（一九〇四）四月に此の草稿を成就せり

○余が社会主義　遠松緒言。余が社会主義とはカールマルクスの社会主義を稟けたのではない。又トルストイの非戦論に服従したのでもない。片山（潜）君や枯川君（堺利彦）や秋水君の様に科学的に解釈を与へて天下ニ鼓舞すると云ふ見識もない。けれども余は余丈けの信仰が有りて、実践して行く考へであるから夫れを書て見たのである。（略）

本論。社会主義とは議論ではないと思う。一種の実践法である。（略）

○詮ずる処余は南無阿弥陀仏には、平等の救済や幸福や平和や安慰やを意味して居ると思ふ。しかし此の南無阿弥陀仏に仇敵を降伏するという意義の発見せらるゝであろーか。（略）

○極楽世界には他方之国土を侵害したと云ふ事も聞かねば、義の為ニ大戦争を起したと云ふ事も一切聞れた事はない。依て余は非戦論者である。戦争は極楽の分人の成す事では無いと思ふて居る。（略）

飢に叫ぶ人もあり貧の為めに操を売る女もあり雨に打るゝ小児もある……》

＊

日々に出会う、飢えに苦しむ人々。貧しいゆえに身を売らざるをえない娘。雨に打たれる子供たち。貧しさと被差別に置かれている人々の現実。――そういう現実があるのに、何が戦争か（日露戦争のさ中）

平等、平和、救済、非戦――阿弥陀の世界。そういう世界こそが、顕明師にとっての社会主義だった。

＊

顕明師は、どんな歩みをした人か。生まれは江戸時代の終わり一八六四年（元治元）、愛知県西春日井郡。三十三歳の一八九七年、新宮町の浄泉寺に入寺。被差別部落の門徒衆を抱える寺院だった。法務の始め、ムラ（被差別部落）のお勤めに行って、出された食事が喉を通らなかった。が、あまりの貧しさの現実に出会い、段々と変わっていく。当時の顕明師を伝える証言が残されている。

《高木和尚さんは、お布施を貰うのが気の毒だといって、お布施をとらなかった。自活するために、高木さんは按摩をならった》（若林芳樹）

お布施は寺家族にとって生活費となるもの。が、顕明師は受けないようにした。また、寺の本堂にムラの子供を集めて寺小屋を開いた。本堂の賽銭を集めて、子供たちに筆・紙・墨を買い与える。

一方、貧しい家計のために娘が売られて行く現実、そして若い衆が兵隊に引っ張られる姿に接し、行動を開始する。

《新宮町に置娼問題が起こった時、高木君は町内の実業派に反抗して廃娼説を唱へた。引続いて戦死者の記念碑を立てんとして各宗寺院が協議した時、高木君は其のやり方に意に充たぬ所あるといって反対した》（沖野岩三郎＝キリスト教牧師）

顕明師は、まさにムラの人々が置かれた現実から出発して、仏教のありようの根本を見つめようとした。当時の大谷派教団は、日清・日露戦争に進んで協力し、それは他の教団も同じだった。

一九〇五年、新宮市に公娼設置の動きが出た時、顕明師は医師の大石誠之助らと反対行動を共にする。一九〇八年八月三日、新宮にきた幸徳秋水の談話会を、浄泉寺にて開く。三〇名もが集まった。

一九一〇年六月、顕明師は大逆事件に連鎖したとして逮捕される。翌年一月に死刑判決を受けるも翌日、無期懲役に減刑となって秋田監獄へ。が、一九一四年六月、秋田監獄で縊死。自死に至ったのは、大谷派僧籍を剥奪されたことが、一番の要因だったと思われる。

毎年六月、浄泉寺で高木顕明師を偲ぶ「遠松忌」が持たれ、今の住職・山口範之さんが熱心に呼びかけてくれている。

四万十市社会福祉センター研修室

＊

顕明師の歩みは何を問いかけているか。顕明師が「極楽世界には他方之国土を侵害したと云ふ事を聞かねば」と記したのは、まっすぐ釈尊の教えに繋がっていた。釈尊説法を収めた『仏説無量寿経』には、

国豊民安　こくぶみんあん
兵戈無用　ひょうがむよう

――国が豊かで民が安らかなことは、兵隊も武器も要らない、と。非戦である。

今日、ロシアによるウクライナ侵略戦争を考えるにつけ、「大逆事件」という冤罪で犠牲となった人たちの行実を尋ね、その非戦思想を学び取りたい。

＊

真宗大谷派は日清戦争（一八九四～九五年）以後、国策に沿い続け、進んで戦争協力して、釈尊と宗祖（親鸞）の平和の教えに背き続けたのだった。ことに太平洋戦争中、各寺院の住職は町や村の青年を戦場に送り出す奨励を率先して担った。また、寺の梵鐘を供出し、本堂内の仏器まで供出した。私が戦後育った島根出雲地の真浄寺は、戦時中、県下で一番早く梵鐘を供出したという。それら金属類は、兵器に化けた。

こうした中、顕明師に繋がる僧侶が二人あった。岐阜の竹中彰元師は「戦争は最大の罪悪だ」と周りに語り続け、検束された。三重の植木徹誠師は出征兵士に「敵を殺すな。敵に殺されるな」と語り続けた。

高木師、竹中師、植木師のことを今日、〝反戦僧侶三羽ガラス〟と呼ぶ。大谷派教団の誇りであり、学び続けていきたい。

（五月二一日、幸徳秋水を顕彰する会二〇二三年度総会　記念講演要旨、会員・黒潮町在住）